

滅びゆくものは時の勢として
本当に仕方がないか？

昨年夏、大阪くらしの今昔館で特別展「大
大阪モダニズム -片岡安の仕事と都市の文化-」
が開催された。大阪市中央公会堂の開館100周
年を記念した展覧会である。その続編ともい
うべき展覧会が現在、同館開催中の企画展「モ
ダン都市大阪の記憶」(4月7日まで)である。

大正14(1925)年、大阪市は第二次市域拡張で
東京市を抜き、世界第6位のマンモス都市とな
る。これが“大大阪”である。都市計画の専門
家であった名市長・關一のもと、御堂筋や地下
鉄建設など都市基盤の整備を進めるとともに、
美術館など文化施設も開設された。前回の展
覧会は、輝かしく発展する近代都市をテーマ
とした。

しかし、“大大阪”誕生は、摩天楼がたち
ならぶ近代化とは別方向の動きを生み出した。
過去の歴史や文化を再発見し、記録し、顕
彰する動きである。大正末から昭和初期の
短期間において、連続して大阪で郷土研究
の雑誌が刊行されることになる。

“大大阪”成立の前年の大正13(1924)年、
心齋橋近くのだるまや書店が刊行した『難波
津』は、古き大阪の発掘や再評価を意図した
雑誌で、創刊号広告に次のように記す。

「新しい大大阪の建設は漸次に進んでゆ
くに反して月日の立つと共に我大阪の遺跡
口碑など所謂浪華の面影は漸次に亡びゆ
きます。その懐かしい難波情調を、せめて
は今の中に書きとめて後世に残し置きたい。」
“大大阪”の建設が進むにつれて「浪華の
面影」が亡んでいく。その亡びゆく「懐か
しい難波情調」を後世に残したいというので
ある。

昭和4(1929)年には、文楽の研究者でも
あった木谷蓬吟(1877~1950)が『郷土
趣味 大阪人』を刊行する。昭和6(1931)
年は郷土研究誌の白眉とされる『上方』が
創刊された。刊行者の南木芳太郎(1882~
1945)は創刊号で語る。

「亡びゆく名所史蹟、廃れゆく風俗行事、
敗残せる上方芸術、その一步步薄れ行く影
を眺めて、私は常に愛惜の情に堪へません。



鉄橋心齋橋の立板古。ペーパークラフト作家のトニー・コ
ール氏の制作だけあって仕上がりはさすが。
会期中の3月23日(土)、コール氏によるワークショップも開
催される。

滅びゆくものは時の勢として如何とも致方
ないが、せめて保存に努めたい、そして記録
に留めて置きたい、これが私の念願でした」
蓬吟にしろ南木にしろ在野の研究者であり、
郷土大阪への愛情と使命感から、自ら資金を調
達して出版に踏み込んだ。輝かしい未来をもた
らすであろう“大大阪”の成立が、大阪の伝統文
化を滅ぼしかねないという危機意識が郷土研究
誌の創刊に走らせたのである。

今回の今昔館の企画展は、前回の「大大阪モ
ダニズム展」では触れなかった“大大阪”誕生の
反対方向のベクトルをとりあげている。

彼らの眼差しで見ると、現代もまた似たよう
な状況にある気がしてくる。思いは様々だろう
が、たとえば、かつてのミナミは、道頓堀や宗右
衛門町、法善寺横丁にしろ浪華情緒あふれる繁
華街として全国に知られた。芝居があり、演芸
があり、文楽があり、大阪らしいゆったりした
風情があった。現在、そうした浪華情緒はほと
んど失われ、インバウンドによる観光客がおし
よせる街に変貌している。

南木芳太郎の言葉を借りると、「滅びゆくもの
は時の勢として如何とも致方ないが」となるが、
本当にそれでよいのだろうか。私としては、薄
れゆくミナミの風情に対して愛惜の情がわき起
こってくる。

…などと書いているうちに、連載開始から9年
が経ち、今回が連載第99回である。平成時代の
最後となる来月がちょうど100回目となるが、連
載はまだ続くらしいので、さて何を書きましょ
うかね。



『上方』第139号(1940年)の
表紙に描かれた「南の五階」こと
眺望閣

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。
1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市
立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。
専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼
殿堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念
佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖
するマンモス／モダン都市の幻像』(創元社)など。